

高知県幡多郡黒潮町のフィールドワーク

ーフィールド実習Ⅱの報告ー

橋尾直和

1. はじめに

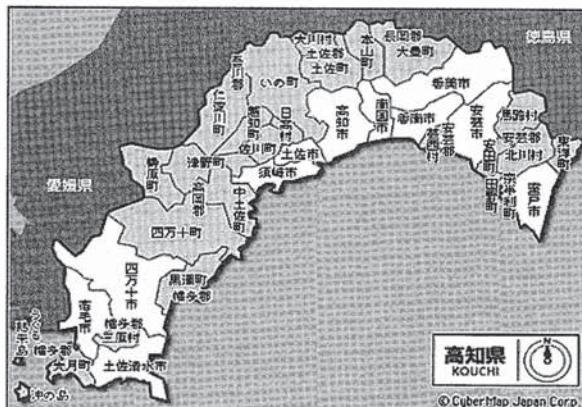
本報告は、2008年9月25日から27日にかけて実施された、「フィールド実習Ⅱ」の一環として実施したフィールドワークの調査報告である。調査は、参加した学生たちが3グループに分かれて、インフォーマント（資料提供者）にそれぞれつき、調査票に基づいて聞き取りをする直接面接調査法を採用した。本調査は、現在「四万十かいどう」推進協議会が行っている「四万十かいどう」風土調査ともタイアップしており、インフォーマントの人選やメンバーの移動の際、ご協力をいただいた。

2. 調査地点の概要

高知県幡多郡黒潮町は、高知県の西南地域にあり、幡多郡の中でも東部に位置している。黒潮町の面積は188.46平方キロメートルである。国土地理院「全国都道府県市町村別面積調」によると、気候は、南国特有の温暖で年間平均気温17度、降雨量2,800mm前後と、高温多雨である（平成18年10月1日現在）。こうした気候を活かして、大方地区では早くから施設園芸や花卉、葉たばこ、水稻を中心に栽培が行われ、農業の盛んな町である。シメジやエノキダケ、エリンギなどの栽培が盛んな町でもある。また、佐賀地区では「土佐カツオ一本釣り漁業」が盛んであり、近年は完全天然塩も代表的な特産物となっている。

黒潮町の人口は、平成21年1月末現在で、13,560人（男6,377、女7,183人）、世帯数は5,778世帯である。

黒潮町は、高知県幡多郡「大方町」「佐賀町」の合併による新しい町として、平成18年3月20日に誕生した。「人が元気、自然が元気、地域が元気」を合い言葉に、2町の速やかな一体化を促進し、新しいまちとして出発した。



3. 「四万十かいどう」風土調査について

「四万十かいどう」は、10市町村にまたがるエリアにだるま夕日やホエールウォッチングなど豊かな観光資源を持ち、「四万十かいどう推進協議会」（会長、村上雅博・高知工科大学教授）のメンバーで報告者である橋尾（副会長・本学教授）らが、「四万十かいどう」風土調査を進めてきた。去る2007年11月28日、国土交通省が提唱する「日本風景街道」に安芸市の「土居廓中（どいかちゅう）」と県西南部地域周辺の「四万十かいどう」が登録され、登録証の交付式が県庁で開かれた。日本風景街道とは、道を舞台に自然や歴史、文化などその土地の資源を活かして、地域の活性化や観光の振興を図る取り組みである。四国では、「四国風景街道協議会」が2007年8月に設立され、風景街道の募集と審議を行ってきた。

「土居廓中」は、江戸時代の武家屋敷が残る町並みである。地域住民で作る「歴史と文化にふれる歩くみちづくり懇話会」（会長、横山彰夫・土居公民館長）が、ウォーキングガイドマップ作りなどの活動を続けている。

「四万十かいどう」とは、

- (1) アカメに会える道（四万十市～旧十和村・旧西土佐村経由～四万十市ルート）、
- (2) だるま夕日が見える道（四万十市～土佐清水市・大月町・宿毛市経由～四万十市ルート）、
- (3) クジラに会える道（黒潮町～四万十町（旧大正町経由）～四万十市ルート、
- (4) サンショウウオに会える道（四万十川源流～梶原町から旧大野見村ルート）

の4ルートを指す。

「四万十かいどう」風土調査は、「日本風景街道」のコンセプトである自然、歴史、文化、風景などをテーマとして「訪れる人」と「迎える地域」の豊かな交流による地域コミュニティの再生を目指した、美しい街道空間を形成することである。また、「四万十・南いよ風景かいどう」のコンセプトである「訪れる人」と「迎える地域」の豊かな交流と地域の活性化を目指し、日本最後の清流"四万十川"と足摺・宇和海の自然・歴史・文化・風景などをテーマに、四国・西南地域の美しい街道づくりに取り組むことなどをベースとした調査を「四万十かいどう」に展開し、地域の文化資源の再発見と情報発信を目指すものである。

これまでに、(1)2006年9月に「アカメに会える道」風土調査（旧西土佐村）、(2)2007年9月に「だるま夕日が見える道」風土調査（大月町柏島）（「花・人・土佐・であい博」に参加）、(3)2008年9月に「クジラに会える道」風土調査（黒潮町）を行ってきた。今後は、(4)2009年9月に「サンショウウオに会える道」風土調査（梶原町）を行う予定である。

4. 調査内容

「フィールド実習Ⅱ」のフィールドワークの内容は、以下の通りである。

9月25日（木）

- ・佐賀の「遊海」にてシーカヤック体験
- ・「であいの里・蜷川」とインフォーマント宅にて風土調査（黒潮町蜷川・奥湊川・浮津）
- ・夕食準備・「あいの里」の皆さんと交流

9月26日(金)

- ・インフォーマント宅にて風土調査(黒潮町伊田・佐賀・入野)

9月27日(土)

- ・インフォーマント宅にて風土調査(黒潮町伊田・佐賀・入野)
- ・「一番館」にてカツオたたき作り体験

具体的な内容は、①民話、②天候に関することば、③挨拶のことば、④食生活のことば、⑤川の名称・地名、⑥祭りの名称、⑦民具の方言呼称などの「文化環境と人びとの暮らし」といった統一テーマで聞き取りを行った後、報告書にまとめて発行・配布すること。地元の方の残しておきたい風土・風景をインタビューし、デジタルカメラで風景を撮影し、学生が収録した地元の皆さんの熱いメッセージを発信することである。この内容を、「四万十・南いよ風景かいどう」のホームページの中の「四万十かいどう」風土調査のホームページ欄に掲載していく予定である。

5. 高知県幡多郡旧大方町蜷川方言

インフォーマント

橋田 ^{ひろむ} 拡さん

昭和2年5月22日生

黒潮町蜷川(旧大方町)



橋田行光さん

昭和5年11月6日生

黒潮町蜷川(旧大方町)



幡多郡黒潮町蜷川地区の生業は、6割が炭焼きで、4割が農業を営んでいる。海岸部から内陸部に少し入った場所にあり、漁業は営んでいる人はいない。川漁は、蟹などを採取している。現在、イチゴ農家が6・7戸、茗荷農家が4戸、タバコ農家が1戸である。

(アクセントの高の部分に棒線一を施した。ダ行・ガ行音の前のンは、前鼻音を表す。以下同様)

【自然談話から得られた資料】

ヘンシモ モッテコイ イソングケン ナシヨ
カタインデミタ ゾンガイ オモイケン
コトーチョルケン ソゴトゴトヤレヤ
ヒヤイローケン マット コッチェ コイヤ
サーチンガ ンデキチョルケン ナカニ ハイッテ タベヤ
ヒトノクノ ナヤンデ ナニシヨラー

【アクセント】

橋	ハジ・ハジン	コワレタ
箸	ハシ・ハシン	オレタ
端	ハジ	ハシン マルイ
雨	アメ・アメン	フル
飴	アメ・アメン	アマイ
雲	クモ・クモン	ウガンヂョル
蜘蛛	クモ・クモン	インゴク

語彙調査を行い、アクセントも記録した。その際、台頭後起式アクセントが顕著に現れた語彙にのみ、網掛けを施した。蜷川方言は、旧中村市方言と同様、東京式アクセントに準ずると見なして良い。

【語彙】

〈民具〉

カラサン (唐棹)

チョーナ (手斧)

コビキノコ / オンガ (木挽き鋸)

(鍬の種類)

下ーングワ

ミトゥマタ

ヒラングワ

ヨトゥマタ

トゥルングワ

オーク (天秤棒)

サース (両端を尖らし草束を突き刺す担い棒・サス)

キンマ (木を運ぶそり)

ゾーリ (草履)

ゴリ (ご飯入れ)

モツソ (弁当箱)

メシゾーケ (夏はこれにご飯を家でも入れていた)

メシビトゥ (冬に入れていた)

〈食〉

アサメシ (明るくなってから食べた)

ヒルメシ (12時ごろ)

コヒル (3時)

バンメシ (暗くなってから食べた)

※昔は4食だった（耕運機ができるまで）

アワ

ソバ

キビ

ムギ

カンショ（さつまいも）

ニンニク（大蒜）

ニンジン（人参）

トーフ（豆腐）

エビ

アイ（鮎）

ボラ

サワガニ

テナガエビ（ヌスットエビともいう）

ゾーニ（切り餅・味噌・ほうれん草・わかめで作る）

〈住〉

ソドマ（土間）

イルリ（囲炉裏）

ジザイ（自在鉤）

トウシニカイ（屋根裏部屋）

ヌワ（庭）

クンド（かまど）

〈遊び〉

クビンマ（肩車）

タケンマ／アシタカ（竹馬）

パンコ（めんこ）

ブンヤ（ゴムで石をはじき飛ばす道具。ぱちんこ）

チャンバラゴッコ（宮本武蔵・荒木又右衛門になりきった）

チーチーパッパ

オジャミ

クビッコカケ（小鳥を仕掛けて捕る）

ジンドリ

オトシイレ

〈暮らし〉

テंगाエ（茅葺き屋根の葺き替え・田植えなどの際の労働交換）

テंगाエモッドシ（労働を手伝ってもらったお返し）

6. 高知県幡多郡旧大方町入野方言

インフォーマント

植田 馨さん

大正14年8月2日生

黒潮町入野（旧大方町）



（アクセントの高の部分に棒線―を施した。ダ行・ガ行音の前のンは、前鼻音を表す。以下同様）

【自然談話から得られた資料】

ビヤル（丈などがしなる。たわむこと）

ヘッサニ アワザッタネー（長い間会わなかったねえ）

エセバスナ（余計な・馬鹿げたことをするな）

モジカウ（反抗すること）

バイアイ（飲み会の前日）

ノミケ（本番）

メクソオトシ（次の日）

ダリヤスケ（晩酌のこと。「ダリヤの肴できた」という）

【アクセント】

橋 ハシ・ハシン コワレタ

箸 ハシ・ハシン オレタ

端 ハシ ハシン マルイ

雨 アメ・アメン ラル

飴 アメ・アメン アマイ

雲 クモ・クモン ウカンヂョル

蜘蛛 クモ・クモン インゴク

入野方言は、蜷川方言と同様、東京式アクセントに準ずると見なして良い。

【語彙】

〈民具〉

ロクロ（地引き網の網を巻き取る道具）

ンゴ（塩取りの道具）

オケ（漉した塩を受ける道具）

シオンガマ（塩を煮る道具）

シオフッコ（塩を入れる道具。最後に落ちてきたのがニガリ）

〈食〉

アサメシ（明るくなってから食べた）

ヒルメシ（12時ごろ）

オコンマ／コンマ／コヒル（3時）

バンメシ（暗くなってから食べた）

シラサ（ちりめんじゃこ）、ドロメ（生のもの）

タチウオ

〈遊び〉

タケンマ／アシタカ（竹馬）

ウトッケ（パンコ・めんこのこと）

ブンヤ（ゴムで石をはじき飛ばす道具。ぱちんこ）

クビッチョ（小鳥を仕掛けて捕る）

ジンドリ

ピッチョーゴマ（男子が遊んだ）

オテッダマ（女子が遊んだ）

〈暮らし〉

カセー（地引き網の際の手伝い・加勢）

テッガエ（杉皮葺き・藁葺きの際の労働交換）

トコヤ／サンパトウヤ（散髪屋）

カラトウ（瀬戸物）

カラトウヤ（瀬戸物屋）

テンヤ（雑貨店）

ミセ（店）「ミセン アルロー（店にあるだろう）」などという。

黒潮町入野の入野漁港は、漁獲高はそう多くない。ちりめんじゃこを捕っている。旧大方町は、製塩業が盛んで、中でも天日塩の生産が多い。昔は塩一升と米一升を交換していた。

7. おわりに

2泊3日の限られた合宿の中での方言調査であったので、アクセントに関しても、断片的な部分体系を示すことしかできなかった。しかし、たとえ断片的であっても生活に関わる語彙を調査し、その背景にある自然と暮らしについて聞き取りをし、記録・保存する作業ができたので、フィールド実習としての役割は概ね果たせたのではないかと思う。紙数の都合で、黒潮町入野に伝わる民話「小松さん」を聞き取りした資料を提示することができなかった。これについては、他稿に譲りたい。

本調査を実施するに当たり、インフォーマントの皆さん、黒潮町役場大方総合支所産業振興課の植田知美さん、宿泊施設「であいの里蜷川」の金子さんとスタッフの皆さんをはじめとする地元の方々には、本当にお世話になりました。現高知市教育長の松原和廣さん、国土交通省四国地方整備局中村河川国道事務所の川田昭彦さんにも、調査にご協力していただきました。昨年柏島風土調査の調査に引き続き、企画の段階からサポートしていただいた、四万十川広域観光推進協議会の三浦治さんにも、篤く御礼申し上げます。ここに記して感謝申し上げます。

【参考文献】

- 橋尾直和（2004）「『文化と環境』から真の『文化環境』へ」『四万十・流域圏学会誌』第3巻第2号
四万十・流域圏学会
- 橋尾直和（2006）「高知県十和村広瀬方言の立ち上げ詞」『方言資料叢刊第9巻：日本語方言立ち上げ詞の研究（柴田武博士88歳御健勝記念）』方言研究ゼミナール
- 橋尾直和（2008a）「高知県大月町柏島のフィールドワーカー「フィールド実習Ⅱ」の調査報告ー」『高知女子大学文化論叢』第10号 高知女子大学文化学部
- 橋尾直和編著（2008b）『高知県大月町柏島のフィールドワーカー「四万十かいどう」風土調査ー』四万十かいどう推進協議会

（はしお なおかず・本学教授）